ペリー来航

150781118　森　円香

著作者　西川武臣

発行年　2016年6月25日

出版社　中公新書

異国船の来航と異国船打払令

１）19世紀初頭、日本近海に西洋諸国の船が頻繁に来航

ア）海外市場を求めアジア進出

２）1805年4月5日、遠山景晋の国書の不受理と通商の拒絶を正式に通達

ア）レザノフの攻撃計画

イ）択捉島、礼文島、利尻島などで日本人、日本船への攻撃計画

→ロシアの脅威に警戒強化

３）1825年4月6日、「異国船打払令」公布

ア）海岸接近の異国船は攻撃対象

→全国で海防強化

イ）モリソン号（1837年7月30日東京湾へ初来航したアメリカ船）への砲撃　東京湾から退去

４）1842年8月28日「異国船打払令」廃止

ア）イギリスとの摩擦回避が理由

イ）モリソン号の砲撃回避

→浦賀奉行所との交渉開始

ペリー艦隊、琉球へ

１）1853年5月26日、ペリー艦隊那覇沖に初来航

　ア）以後５回に渡り琉球を訪問

2）琉米修好条約の締結

　ア）1854年7月11日、琉球王国とアメリカ那覇において琉米修好条約締結

３）ペリーの要求

ア）1853年7月28日

ｉ）石炭の貯蔵庫設置

ⅱ）アメリカ人の市場での自由交易

ⅲ）密偵のアメリカ人の尾行廃止

→ペリーの要求の実現

４）1879年、琉球が日本へ統合

ア）条約の効力低下

ペリー上陸

１）1853年7月8日ペリー艦隊東京湾へ停船

　ア）幕府の戦闘回避により交渉開始

　　→ペリーにとって好都合

　　（戦争禁止命令が出ていたため）

２）サスケハナ号での三度の会談

　ア）浦賀奉行所の与力（中島三郎助、通訳の堀達之助）とペリーによる会談

再来から日米和親条約締結へ

１）1854年3月8日、第一回目の日米交渉

　ア）日本側全権委員（林復斎、井戸覚弘、伊沢政義、鵜殿長鋭、松崎満太郎）内議所において幕府が難破船乗組員の救助、アメリカ船への物資補給の決定を通達

２）3月17日、第二回目の交渉

　ア）浦賀、神奈川、松前、那覇の開港要求

　　→那覇の代わりに下田を候補

　　ｉ）3月20日、下田、箱館の開港決定

３）3月24日、第三回目の交渉

ア）ペリーによる下田、箱館の調査

４）3月28日、第四回目の交渉

ア）下田の開港の了承

イ）条約文の作成

ｉ）英語、オランダ語、漢文、日本語の条約文

→3月31日、日米和親条約締結

条約締結後の日本

１）日本の急速な国際化

ア）1854年10月14日、イギリス東インド艦隊司令長官スターリングが長崎へ来航

→イギリス船に対し長崎、箱館の開港決定（日英和親条約）

イ）1855年2月7日、日露和親条約（長崎、箱館、下田の開港）

２）アメリカ総領事館の開設

ア）1856年8月21日タウンゼント・ハリスのアメリカ船が下田に入港

ｉ）総領事の任命書を持参

→9月11日、ハリスが西洋諸国初の駐日総領事

結論

ペリー来航により日本の変化

１）急速な国際化

２）大艦隊来航への危機感
→西洋文化に驚きと衝撃

日本人近代化のきっかけへ